

こう考えた方が良いのである。

大内氏の圧力に対して芸備地方の国人領主の採った対応は様々であった。安芸毛利氏の場合、当主興元の上洛中は井上氏を中心とする宿老によって政務が執られたが、その結果、庶子元就の所領は井上一族によって押領されている。国人領主の在京には大きな危険が伴ったのである。

宮氏の場合、当主の留守を嫡子を守ることによってこの危機に対応しようとした。そして、この結果出されたのが六号文書であった。書中の「社頭の御供、無沙汰に於いては何時たりといえども改むべく候」という文言は、この危険に対する政盛父子の決意を示した蓋し名言と言えよう。

## 随 想

# 雨月物語とふるさと讃岐

佐藤 秀子

雨月物語、卷之一の白峯は、讃岐の坂出にある五色の峰（赤白青黒黄）のうちの一つ、白峰山が舞台となっている。北側には絶壁の兎ヶ獄、山麓左には南北朝、一三六一年、足利義詮の執事の細川清氏が菅領細川頼之と対戦した高屋城址があり、家臣の墓である三十六塚もある。

高校時代の放課後はいつも図書館にゆき、殆どがセピア色の本に囲まれて、古びた机や床に語りかける夕日を眺めて、もの想いにふけていたが、古文の時間に習った吉備津の釜の結末の凄惨さと江戸時代の板本の挿絵が心に残り、その日は雨月物語を全巻読み通した。

崇徳上皇の受けた讃岐配流の措置は謀反を起したとは言え（母と祖父、白河法皇の不義の子であることが父の鳥羽天皇に疎んぜられる遠因となり、実子の親王も帝位につけなかったこと等）保元の乱や同時代の本を讀むにつけ、すべて、この事件の元凶は、独裁、専制的で愛憎の念が、激しかった法皇にある様に思え、崇りと読める一字を上皇の名につけたことも因縁めいていて、秋成が、この物語を後世の上皇に同情的な庶民感情に基づいて書いたらしいという後書きを読んだ時は、なぜか嬉しかった。

九年間の謫居の生活は、それ迄の恵まれた生活に比べてきみしきのみわみだったことだろう：今でものんびりとした田舎であるから当時の様は推してしるべきである。四十六才の若さで亡くなり、その三年後西行が訪ねた時は御陵のみで御堂はもうなかったとあったが、おそらく粗末な御堂だったのですぐ朽ちてしまったのだろう。そこで経を唱え怨霊を慰めたところ御陵がにわか揺るやいだと：。無念のおもいは体にのしかかる墓石の重みを、はねかえしてあまりあったに違いない。

西行の和歌の返歌をしようと姿を現した上皇の霊の挿絵も凄じく、わたしはその怒りの姿を夜毎く思いたさずにはいられなかった。真赤な顔に雑草のように乱れた髪、眼を吊りあげ、熱い息を苦しげに吐き、衣は柿漆色、手足の爪はのび、さながら魔王の形。

人の欲望や自己本位な考え方が小さいから多勢をまきこんだ戦いになる。自分の住んでいた隣りの町で八百年も前にあった史実が心の底に巣くって何年になるだろう。明治時代になっても、天皇が崇徳上皇を慰める為に特別の慰霊祭を行い御陵を整えたり彼は歴史上最も問題視された天皇であったの一文を読んで、頰杖について、ぼんやりとしている夜更け、彼方白峰に潜んでいるかもしれない上皇の霊を想ってみる。

保元の乱、平治の乱と続き平氏の滅亡、源氏の政権掌握、そして中世への混沌とした時代が続くのだが、自分の心をとらえて離さない歴史上の事件は、歴史の事実とは別に、やはり夢の中でその模様を再現して登場人物やナレーターになってみたいものである。

#### (編集後記)

十月に入りまして、秋らしいですがすがしい天気になってまいりました。皆様にはますますご清栄のことと思います。

私達「中世を読む」会が発足して二年目になりました。発足時より『山内首藤家文書』（東大家わけ文書）を継続して読んでいますが、二年目を迎えたこのあたりで、雑誌のようなものをということになり、「中世を読む」という書名で発刊することになりました。

執筆者は出内（元福山商業高校々長）さん、下津間（草戸千軒調査研究所指導主事）さん、田口（会社役員）さん、随想をかかれた佐藤（会計担当）さんと私です。

(K)

中世を読む 第一号 一九八八・十

発行 中世を読む会

事務局 福山市多治米町五一一九一八

田口 義之

☎(〇八四九)五三一六一五七

印刷 塩出印刷所 福山市引野町一―二七〇

☎(〇八四九)四一―〇九七〇